

Title	日本切支丹宗門史 上巻(レオン・パジェス著, 吉田小五郎譯, 岩波文庫)
Sub Title	
Author	今宮, 新(Imamiya, Shin)
Publisher	三田史学会
Publication year	1938
Jtitle	史学 Vol.17, No.1 (1938. 8) ,p.137- 139
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19380800-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

日本切支丹宗門史 上巻（レオン・バジエス著）

岩田小五郎譯庫

本書が日本の切支丹研究者に如何に大なる貢献を與へたかは、こゝに言ふまでもない程明白なことである。従つてかかる名著の邦譯が、一般より待望された事も久しいものであつたらうと思はれるが、今まで之が行はれなかつたのは、この翻譯が極めて困難であつた爲めであらう。今回吉田氏が非常なる長年の努力を拂つてこれを完成された事は、單に切支丹研究者ばかりでなく、一般史家にとつても誠に幸な事と言はなければならぬ。

バジエスは日本圖書目録等の編纂者として有名であるが、吉田氏に依ると、彼は又膨大な日本帝國史の著作を企てたのであつて、本書は丁度その第三巻にあたり、他の一、二、三巻は出版せられずに終つたとの事である。さて本書の内容に就いて、譯者はその前書に、大略次の如く述べてゐる。

本書は徳川氏初期の三代、日本の切支丹史としては、考へよう依つて、最も内容のある時代を取扱つたものである。普通には織田時代より豊臣時代の初期にかけて、切支丹宗はその興隆の頂點に達し、其後は漸次衰退に向つたとするのであるが、信仰そのものから言へば、此の所謂衰退期が最も熱烈であつたのである。貴族

を中心とし、多分に好奇的の要素を有してゐた初期の切支丹は、譯なく潰滅したが、此期に於ては、多くの人々が慘虐を極めた迫害の下をくぐつて信仰をつゞけ、その一部の者は幕末明治に至るまで之を維持したのである。本書は此期間に於ける史料の寶庫であつて、慶長三年（一五九八年）より慶安四年（一六五一年）即ち家康、秀忠、家光三代の政治上社會上日歐交通史上の主なる事件を程よく配し、切支丹史上の出来事を總て丹念に記述した編年史である。而して忠實なる編年史であるために、一事件も時には幾つかに割かれる事があるが、日本側の史料との比較対象には極めて便利である。然も史料として甚だ豊富であつて、到る處に讀者は史料を發見し我ものとすることが出来るのである。嘗て有名であつた「鮮血遺書」も之より多くの材料を得たものであり、姉崎博士の切支丹に關する膨大な著作も、之に負ふ所が少くないのである。博士はその一著書（切支丹迫害史中の人物事跡）に於て「バゼスがあれだけの集成をしておいてくれなければ、到底企て及ぶ事業ではなかつた。此點については、バゼスの忠實綿密な勤労に對して、篤く感謝の意を表せざるを得ない。」と述べられてゐる位である。

國史の研究が、外人の記録や觀察に依て、益々補はれなければならぬ時に當つて、以上の如き内容價値を有する本書は一般史家にとつても亦多くの示唆を與ふるものがある。吾々はキリスト教徒として、從容死についた小西行長や細川忠興夫人の最後、及び、多くの殉教者達に加へられた言語に絶する拷問と死刑との記述に、信仰の威力を眼前に見るばかりではなく、慶長時代に有馬

地方に於ては、すでに多くの小供達がラテン語を學び、又大名の或者は西洋流の數學や天文學を知り、遊星の運行を示す機械をもあやつり、内裏は地球儀に興味を有せられて、その製作を望ませられた等の事をも知り得るのである。フイリッピンの總督ドン・ビベロが、秀忠や家康に謁した時の印象を、秀忠は三十五歳位で顔は大部褐色を帶びてゐたが、上品で立派であり、家康は六十歳位で、中背でかなり肥満し、顔色は世子より褐色が薄く、その風貌は犯すべからざる所があると共に、情味があつた等と記し、又大阪陣については、且元を反逆者となし、夏の陣には、家康が勝利を斷念して切腹せんとした程の苦戦であつたと言ひ、「秀頼の最後は不明であるが、形勢から考へて、一般の虐殺中に市内で果てたらしい。判然しないこの主君の死を以て、大閣様の無限の希望は終りを告げた。蓋し、彼の不信心の傲慢に對する當然の罰と言ふべきである。」となし、この動亂中に於ける宣教師達の活動を記してゐる。更に又ディエゴ師の投ぜられた江戸牢獄の記事は、讀む者をして目を覆はしむる程悲惨を極めたものである。

本書は到る所吾々に新しい事實と興味を示してゐるけれども、その人物の批判、又は事件の記述が、何れも正鵠を得たものであるとは言ひ難い、切支丹に反対した大名は、何れも同情の無い言葉で批判され、キリスト教徒は、何れも立派な人物として記されてゐるのは、本書の性質上已むを得ない事である。吾々は、恐らく如何なる歴史家に對しても、絶對公平な態度は要求し得ないものである。従つてかゝる點が多少存しても、本書全體の價値を損するものとは考へられないものである。兎に角本書に於て、吾々は德

或者は西洋流の數學や天文學を知り、遊星の運行を示す機械をもあやつり、内裏は地球儀に興味を有せられて、その製作を望ませられた等の事をも知り得るのである。フイリッピンの總督ドン・ビベロが、秀忠や家康に謁した時の印象を、秀忠は三十五歳位で顔は大部褐色を帶びてゐたが、上品で立派であり、家康は六十歳位で、中背でかなり肥満し、顔色は世子より褐色が薄く、その風貌は犯すべからざる所があると共に、情味があつた等と記し、又大阪陣については、且元を反逆者となし、夏の陣には、家康が勝利を断念して切腹せんとした程の苦戦であつたと言ひ、「秀頼の最後は不明であるが、形勢から考へて、一般の虐殺中に市内で果てたらしい。判然しないこの主君の死を以て、大閣様の無限の希望は終りを告げた。蓋し、彼の不信心の傲慢に對する當然の罰と言ふべきである。」となし、この動亂中に於ける宣教師達の活動を記してゐる。更に又ディエゴ師の投ぜられた江戸牢獄の記事は、讀む者をして目を覆はしむる程悲惨を極めたものである。

本書は到る所吾々に新しい事實と興味を示してゐるけれども、その人物の批判、又は事件の記述が、何れも正鵠を得たものであるとは言ひ難い、切支丹に反対した大名は、何れも同情の無い言葉で批判され、キリスト教徒は、何れも立派な人物として記されてゐるのは、本書の性質上已むを得ない事である。吾々は、恐らく如何なる歴史家に對しても、絶對公平な態度は要求し得ないものである。従つてかゝる點が多少存しても、本書全體の價値を損するものとは考へられないものである。兎に角本書に於て、吾々は德

川初期のキリスト教徒の活動、及び外人の觀察に依る當時の政治社會情勢を知り得るのであつて、切支丹研究者は言ふまでもなく、一般史家にとつても、必讀の書である事は言ふまでもない。

翻譯者吉田氏は、本塾史學科の出身であつて、すでに切支丹大名記の翻譯者及びシャギエル傳の著者として學界に知名の人である。氏はかなり以前より、本書の邦譯を企てられ、その一部はすでに、本誌に發表された事もあつた。其後約十年間、氏は推稿を重ねられたのであつて、「長い年月を費し、多少の努力もしたが、何分淺學菲才の致すところ、校正のペンを探りつゝ歎息すること多かつた。……今、世におくるに當り、そぞろに、首を刃下に曝せし殉教者を憶ふ。」と述べられてゐるが、本書を一讀した者は、その譯語の正確さと選擇に注意された事、私注を加へられた事、及び地名人物を日本名に當てるについて、或は原著者の使用した日本語を示し、又は不明なるものには假名を附し、難解のものには原文を示す等の事は、氏の熱心さと綿密さとを以て初めて爲し得るものであり、非常な苦心を拂はれた事が知り得るのである。而して更に氏は翻譯の完全を期する爲めに、イエズス會のヨゼフ・クリセル神父に校閱を受け、本文中の宗教用語はすべてカトリック用語に依り、俗名は通俗に從つてゐる。此等の點より見ても、吉田氏が如何に周到なる用意と綿密なる注意と非常なる苦心の下に此翻譯を爲されたかゞ知られるので、一般の翻譯者とは全く軌道を一にするものではない。以上極めて大略の紹介であるが、自分は吉田氏の長年の苦心と努力に對して、滿腔の謝意を表すると共

に、本翻譯の完成が一日も速かならん事を祈るものである。

(今宮 新)

のところは、現制度に妥協してしまふでせう。』

『幕末の國際資本の戰術は常に一度支那でテストをした上

明治維新史讀本（千倉惣五郎著）

（今宮 新）

最近に於ける維新史研究が文部省の維新史料綱要の刊行を先頭とする新史料の夥しき發表に空前の活況を呈して居ることは喜ぶべきであるが、他面あらゆる視角よりする綜合的研究の發達がともすればその學的成果と現象形態學的研究との遊離を感じしめて居る時、それらの研究の上に立つて、しかも錯綜極りなき維新史の變轉を『正しく平易に』敍述せんと試みた本書の著者の苦心は十分認められて然るべきであらう。

維新史に關する著書は實に驚くべき數に上つてゐるが、大衆に縁遠い専門的研究でなければ、卑俗な、學的意義の渺いものが多い時、手頃な容積に巧みに盛られた興味ある本書の内容は維新史に關心を有つものゝ一讀をかち得る資格を十分に握つてゐる。

『ペルリの日本遠征は……米國にとつては、世界の産業資本國の一環として、當然執るべき既定の方針だつたのです。』

『金力を擁した商人、高利貸は……政治的には極めて無力なのです。といふのも、高利貸資本や、商業資本といふものが、本來封建的なものに依存して發達したものであり、武士階級が、農民を卵を産む雞と考へたと同様の意味で、商人、高利貸につての幕府や諸侯や武士は、農民をひつくるめて、一列の雞だつたのです。支配されて利を喰はせられて居たとしたら、大抵

『本質的に見て、幕末の開國は自己否定ですが……斷片的知識によつても、通商がいかに不可避なものであるかは、彼等も充分に知らさせて居ます。たゞそのために封建社會が密閉した棺内に保管せられた木乃伊が、新鮮な空氣に觸れて、直ちに崩壊過程を辿るといふ點が困るだけです。』

以上二、三摘出した部分だけでもそれらが我々に既に何等かの機會に屢々眼に觸れたことのあるのに氣付かれるであらう。著者はかく諸方面的著書を參照取捨して著者の云ふ『凄まじい力』としての『國際性の裏打』につとめてゐるのである。しかもそれらが比較的擬音的效果に止つたのは一にそれらに註記が施されなかつた爲と思はれ、廣汎なる引用史料に出典の示されなかつたことと共に既に（他の機會に服部之總氏によつて指摘された所であるが）、評者は著者折角の努力の爲に惜しまざるを得ない。

最後に一言言及し度いのは、本書が前半の出色にも拘らず、後半著しく平坦化して精彩を缺いて居ることである。既に緒言にて

『庶民は……一般的には自爲發生的な素朴な壓力を、一揆、打毀の形で、或は聲なき聲で、訴へて居るに過ぎません。しかしこの聲と形が一番決定的な力であることを、局に當る人々が、漠然と感じて居たことは史實の證明するところです。』

といみぢくも言放たれながら、思想的動向の極度のスパークの起